

所長あいさつ

名古屋市西部地域療育センター所長　大矢 公江

4月より西部地域療育センターに赴任いたしました小児科医の大矢と申します。西部地域療育センターでお仕事をさせていただくのは約10年ぶりで、再びこの地域の子どもたちやご家族のみなさまと関わることができることを、とても嬉しく感じています。どうぞよろしくお願いいたします。

日々センターで出会う子どもたちは、一人ひとりが違った強みや力を持ち、それぞれのペースで成長しています。その中には、発達のゆっくりさや行動面の特性、コミュニケーションの難しさを抱えている子もいます。それでも子どもたちが地域の中で安心して過ごし、自分らしさを大切にしながら育っていけるのは、日頃から関わってくださっている方々が、子どもたちの姿を丁寧に見つめ、根気強く寄り添ってくださっているからだと感じています。

赴任してまだ2か月ほどですが、園の先生方とお会いした際のお話や、お手紙に書かれた子どもたちの様子から、みなさまが日々悩みながらも真剣に子どもたちと向き合っておられることが伝わってきます。保育園・幼稚園・認定こども園、児童発達支援事業所、保健センターなど、地域のさまざまな場で支援に携わってくださっているみなさまに、あらためて心より感謝申し上げます。

私は、子どもたち自身の「思い・願い」に丁寧に目を向けたいと考えています。言葉でうまく表現できなくても、「これをやってみたい」「友達と遊びたい」「できるかどうか不安な気持ちをわかってほしい」「認めてもらいたい」など、子どもたちはそれぞれに願いや思いを持っています。それは子どもたち自身が持っている育ちへの大切な力となります。支援とは、その子がもともと持っている可能性や強みを見つけ、その子らしく育っていく力を支えることだと思います。みなさまと一緒に、子どもたちの小さな挑戦や成功を大切にしながら、その思いに寄り添っていけたらと願っています。

そして、子どもへの支援を考える上で欠かせないのが、保護者の方への支えです。発達に関する悩みや不安はとても大きく、「どう接したらいいのだろう」「これは正解なの?」と迷いながら子育てをされている方も多くいらっしゃいます。そんな時に大切なのは、助言を伝えることだけではなく、まず保護者の方の気持ちに耳を傾け、その思いを受け止める姿勢だと感じています。

保護者の方には、それぞれ大切にしてきた価値観や願いがあり、子どもとともに歩んできた歴史があります。その思いを丁寧に聴き、尊重しながら支援を進めることが、信頼関係を築く大切な土台になります。保護者の方が安心して相談できる環境は、子どもたちにとっても安心して成長していける場につながります。つながる人や場所が多いほど、保護者の方がもともと持っている力を子育てに活かしやすくなるのではないでしょうか。

すなわち、子どもや家族を支えるためには一つの機関だけで完結することは難しく、保育園・幼稚園、療育機関、保健センター、医療機関など、立場や専門性は違っても、みんな同じ子どもとご家族を支える同志としてつながり、お互いの視点や情報を共有しながら協力していくことが、より良い支援につながると考えます。

西部地域療育センターも、そのつながりの一員として、これからも積極的に関わっていきたいと考えています。困った時に気軽に相談し合える関係を築き、地域全体で子どもたちとご家族を支えるネットワークを育んでいけたら嬉しく思います。みなさまと共に学び、悩み、知恵を出し合いながら、この地域の子どもたちの成長を支えていければ幸いです。今後ともお力添えのほど、どうぞよろしくお願いいたします。

子どもの運動器と発達

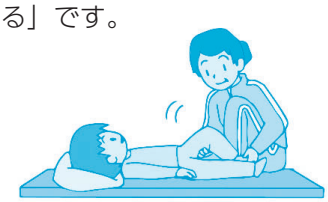
名古屋市西部地域療育センター　金子 浩史（整形外科医師）

令和8年４月から勤務している整形外科の金子と申します。名古屋市西部地域療育センター整形外科では、『運動器』に問題がある子どもを対象に外来診療を火・水・木曜日に行っています。

人が自分の身体を自由に動かすことができるのは、骨・関節・筋肉・神経などで構成される『運動器』の働きによります。『運動器』はそれぞれが連携して働いており、どのひとつが悪くても身体はうまく動きません。また、複数の『運動器』が同時に障害を受けることもあります。

ちなみに行政による定義として肢体不自由ということばがあります。肢体とは上肢（肩から手）、下肢（股から足）、体幹（首から腰）を示しており、これらに含まれる『運動器』が病気やけがで損なわれて、食事をする・着替えをする・座る・立ち上がる・歩くなどの日常生活における動作が困難な状態を肢体不自由といいます。

整形外科を受診するきっかけとして比較的多いのは、「運動発達が遅れている」「歩き方がおかしい」「足のかたちが気になる」です。



運動発達は、首のすわり→寝返り→お座り→ハイハイ→つかまり立ち→つたい歩きという段階を踏み、1歳から1歳半ごろでひとり歩きを始めることが一般的です。脳性麻痺や二分脊椎などの麻痺性疾患では神経に障害が生じて筋肉がうまく働かず、自分で『運動器』を自由に動かすことができません。運動発達が遅れるだけでなく、成長とともに筋肉が硬く短縮して、結果的に骨・関節の変形が生じます。先天性ミオパチーや筋ジストロフィーなどの筋疾患、ダウン症候群などの染色体異常、骨形成不全症などの骨系統疾患や多発性関節拘縮症でも運動発達に遅れが生じます。また、疾患の重症度によっては運動発達が停滞することがあります。

歩き方に影響を及ぼす主な原因として下肢のアライメント異常と骨のねじれがあります。股関節・膝関節・足関節はほぼ一直線上に並んでおり、これを正常なアライメントといいます。異常なアライメントとしてO脚とX脚がありますが、『運動器』に異常のない正常な発育過程においても0歳から２歳ではO脚、2歳から6歳ではX脚がみられることがあり、歩き方にも少なからず影響がでます。ただし、この年齢から外れている場合や程度が強い場合は原因の検索が必要です。また、内股・ガニ股ということばがあり、歩く時に足先がそれぞれ内側・外側に向く状態をいいます。「股（また）」が含まれていることから股関節の骨のねじれによることがほとんどですが、すねの骨にねじれがあるために内股・ガニ股に見えることがあります。

足のかたちは、生まれつき異常がある場合と立ち始めてから明らかになる場合があります。先天的な変形として内反足や垂直距骨などがあり、これらは専門病院での治療が必要になります。一方、立ち始めてから気づかれる変形として扁平足があります。足の内側にある土踏まずを縦アーチといい、体重をかけることでこれが崩れてしまう変形です。歩き始めたころは足の筋力が十分でなく、また皮下脂肪が厚いため扁平足に見えることがほとんどですが、成長とともにしっかりとした縦アーチが形成されていきます。ただし生まれつき下肢の関節が柔らかいと扁平足が続いて、歩きが安定するまで時間がかかることがあります。

リハビリテーションでは、筋肉の硬さや関節のかたちなど『運動器』の特徴を評価した上で子どもが楽に過ごすことができる姿勢を取り入れたり、座る・立つなどの姿勢を保つ練習をしたり、ハイハイや歩く運動をしたり、遊びを通じて日常生活動作の練習をしたり、子どもに合わせて実施しています。また、リハビリテーションを行いながら日常生活・学校生活で必要となる補装具を処方しています。補装具には、変形を整える装具・歩行を安定させるための装具・歩行器・車いす・姿勢保持装置などが含まれます。リハビリテーションを担当している理学療法士や作業療法士、定期的に訪れている義肢装具士らと協力しながら、子どもの状態に合わせて製作し、成長に合わせて調整したり作り直したりしています。

このように整形外科では、『運動器』に問題がある子どもの診察、リハビリテーション、補装具の処方を行っています。気になることがあれば、遠慮なくご相談ください。



令和7年度　西部地域療育センター連続講座（2025年11月5日）

集団生活で気になる子への対応～問題解決＝支援のヒント～

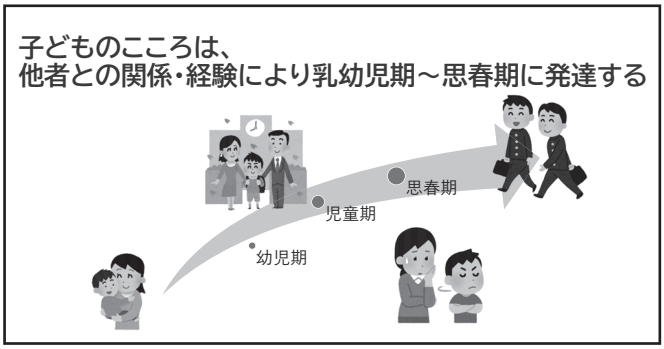
名古屋市立大学大学院医学研究科　こころの発達診療研究センター

山田 理恵 助教（公認心理師・言語聴覚士・ノースカロライナ大学 TEACCH® 自閉症プログラム公認臨床家・PCIT 親子相互交流療法機関内トレーナー・CARE（子どもと大人の絆を深めるプログラム）ファシリテーター）

今日は、日々の臨床、現場のヒントになるお話を皆さまにお持ち帰りいただけたらと思います。講演会のタイトルですが、当初「集団生活で気になる子への対応～問題解決のヒント」としていましたが、「解決」という言葉がしっくりこず「支援」に変更しました。「問題を解決する」というよりも「子どもへの支援を考える」ためのヒントとして聞いていただければ、と思います。

名古屋市立大学こころの発達診療研究センターは、主に発達障害のある子どもと大人、ご家族の支援を目的にして、研究、医療そして地域への還元をすすめています。

こころの発達で課題になることをいくつかあげてみます。乳幼児期には「発達の遅れ・育てにくさ」、集団に入った時に「集団行動が難しい」、家族の負担の大きさも症状の気付きになるところです。学齢期には「学習の遅れ」「集団行動ができない」「いじめ・不登校・ゲーム依存」。青年期を迎え大人になると、孤立や就労の問題、精神疾患の発症など様々な困難があります。子どものこころは、他の人との関係や経験によって育まれていきます。出生から成人期までは途切れがない支援が必要で、名古屋市立大学こころの発達支援センターはそのサポートを役割としています。



神経発達症（発達障害）には、様々な診断が含まれています、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、知的発達症。学齢期になると、限局性学習症、発達性協調運動症。最近は「○○障害」ではなく「○○症」という言葉が一般的です。これは、持っている特性が障害になるかどうかは環境との相性による、という考え方に基づいています。その子に合った環境であれば困ることは減ってくるし、合わない環境だと困ることが際立ってしまう。それが生活の質や学習の経験値を阻害すると障害になってきます。

さらに難しいのが「グレーゾーン」と呼ばれる子ども達。発達途上なので見極めが非常に難しいのですが、より支援が必要です。わかりにくい、気づかれにくい、本人も周囲も支援に届きにくいグレーだからこそ、支援者がみていく必要があり、早めの支援が有効です。

神経発達症のどの特性が濃いのか、重なり合っているのか、発達のスピードが遅いだけなのか、凸凹があるのか、それは個々の子どもをみないとわかりません。ただ、支援者が気になっている子どもは、子ども自体も困っている可能性があります。わがままや甘えにみえる特性も、興味関心や環境の影響が大きいことがあります。

今日は、多様な神経発達症の子どもへの支援のヒントをいくつかご紹介します。「わがままなのか？特性・症状なのか？」という点にとらわれるよりも、子どもをもう一度見つめ直して、できることから取り組んでいただけたら、と思います。

ヒント1「氷山モデル」行動の背景と特性に着目する

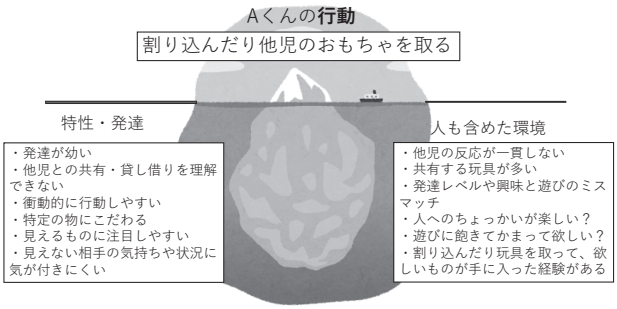
大きな氷山が海に浮かんでいる時、見えているところはほんの一部です。かんしゃく、他害、こだわりなどが問題行動として大人の目に留まると、この行動を何とかしたくなります。氷山モデルでは、この見える行動の下に隠れている、行動の背景や子どもの特性に注目し、環境や状況も観察します。水面下に隠された背景を掴んで支援を検討するのが氷山モデルの考え方です。

事例Aくん　割り込んだり他児のおもちゃを取る



「自由遊びの時間、友達のおもちゃを
強引に取って喧嘩になります。
友達に貸してって言えません。
何度、注意しても直りません。」

事例Aくんの行動を氷山モデルで理解する



事例Aくん　支援のヒント

・まずは環境の調整　　(例)自由遊び時間に
他児とAくんの間に先生が入る。

(例)Aくん用のカゴに玩具を分ける。

・適切な行動を促す　　(例)A君が「貸して」と言える

例えば、自由遊びの時にお友達のおもちゃを取ったり、割り込んで喧嘩をするAくんに、退屈で気が散りやすい、コミュニケーションの苦手さがある、という背景が考えられる場合の支援のヒントです。まずは環境調整。1つは、自由遊びの時間に他の子との間に先生が入ってサポートをする。お友達との遊びに参加できるようなソフトなサポート、Aくんが退屈したり、自分のおもちゃに飽きないようにサポートするイメージです。対人コミュニケーションの発達過程で、先生がモデルになってお友達と遊べるように手助けすることは大切です。トラブルになってから先生が入っていくと、失敗の学習になってしまうので、成功体験を積めるようなサポートが必要です。もう1つのヒントとしては、自分の物と他の子が使っている物を区別しやすいように例えばAくん専用のカゴを用意して、そこに遊びたいおもちゃを入れる。目に見える形で具体的でわかりやすくするのは、視覚的構造化というＴＥＡＣＣＨ自閉症プログラムで良く使われる方法です。

他の子と適切に関わるためには、どんなステップで具体的に教えたらいいでしょうか。スモールステップで考えてみます。まず、Aくんに先生が「貸して」と言ってみせます。これは「モデリング」と言います。まず、先生自身が「貸して」を実行します。今度はAくんに「貸して」を言ってもらう。先生がまず見本を見せて、それを今度Aくんが先生にも使ってみる。「ロールプレイ」です。絵本やパペットでもできますが、実際にやることもできます。今度は他の子のところにAくんが行きます。その時、先生と一緒に「貸して」を言う。その時に先生はAくんの貸しての動作をサポートする。先生が手を持ってあげてもいいし、手を重ねてあげてもいい。こういったサポートを入れてお友達に「貸して」を言う、実際に実行します。この時には、貸してくれそうなお友達を選びましょう。次は、先生は近くで見ているだけです。サポートがなくても、A君がお友達に「貸して」と言えるのを先生が近くで見て、できたときに褒める。「上手に言えたね、貸してもらえたね」と具体的に褒めると、それが成功体験になり、「貸して」という行動が学習されます。これを「強化」と呼びます。

例)スモールステップで具体的に教える

①Aくんに先生が「貸して」と言って見せる	(モデリング)
②Aくんが先生に「貸して」と言う	(ロールプレイ)
③A君が先生と一緒に友達に「貸して」を言う	(サポート)
④先生の前でAくんが友達に「貸して」を言う	(褒めて強化)

このように、特性なのか環境の影響なのか、どちらかを決める必要はなく、背景と可能性から、望ましい行動を子どもに教えていく方法を検討していくのが氷山モデルです。

ヒント2　ABC分析　行動の機能(結果)に着目する

行動には、きっかけと結果があり、その結果によってその行動が繰り返されます。ABC分析（行動の随伴性行動の分析）のBは困った行動（Behavior)、その前のきっかけになる状況や出来事がA（Antecedent/先行刺激)、行動の結果がC(Consequence/後続刺激)です。

授業中に落ち着きがなく、じっとしていられず、おしゃべりが止まらず指示を聞いていないため、先生に注意されるBくん。状況（A）は、授業中です。行動の結果（C）について考えてみます。授業中に騒ぐと、授業が中断して勉強を回避することができます。先生に叱られて、同級生から注目されます。

事例Bくん　落ち着きがない



**「落ち着きがないので困ります。
じっとしていません。
おしゃべりが止まらなかったり、
指示を聞いていないので、いつも
注意されます。
何度言っても直りません。」**

事例Bくん　特性・環境の影響を推測

- **気が散るものがある？**
- **集中が続かない？**
- **勉強が嫌い？**
- **目立ちたい？**



子どもにとってメリットがある結果は、行動を強化します。問題を強化する機能の一つが「要求」です。例えば、買ってほしいと騒ぐと、おもちゃが買ってもらえる。泣いたり騒ぐことで、嫌なことから逃れる「回避」もあります。「注目」の機能もあります。問題行動は大人の注目が得られます。子どもにとって怖いのは、そばにいる大人が存在を無視した時で、これは、自分で生きていく力がない子どもにとっては安心安全を脅かす行為です。叱られても注目を得ようとするのが子どもです。あまり増えてほしくない問題行動は、大人ができるだけ薄い反応にすると、減っていく場合があります。問題行動を強化する機能（結果）を推測して、子どもにとってのご褒美を与えないようにしていきましょう。

問題行動を強化する機能（結果）

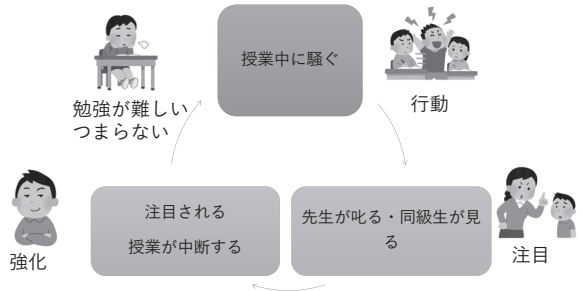
- **欲しいものを得る　：要求**
- **嫌なことから逃れる：回避**
- **注目を得る　　：注目**
- **不快な感覚刺激を避ける、好きな感覚刺激求める　　：感覚刺激**

Bくんの例です。授業中（A）に騒ぐ（B）と、勉強から回避でき、みんなから注目される（C）結果がBくんにとってのポジティブな機能になるので、繰り返されます。叱れば叱るほど強化されてしまうので、作戦を練り直しましょう。良い行動に注目をします。授業中の例えば初めの頃とか面白そうな課題で授業に参加している時に、先生が近づいてさりげなく褒める。この時のポイントは具体的に、**「上手に書けてるね」「座ってお話が聞けたね」**など行動に注目して声をかけます。そうすると、良い行動が強化されて授業中の良い行動が増えるという循環になります。

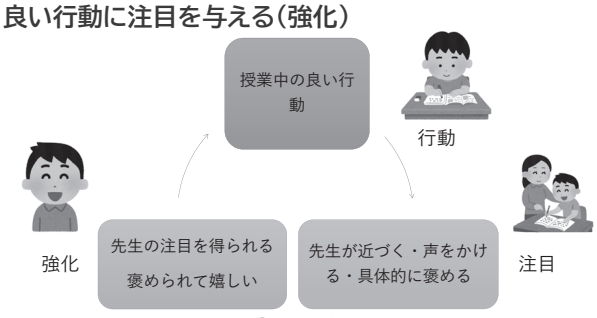
**ABC分析は
問題行動を強化する機能（結果）に注目**



叱ること（注目）で強化される例



良い行動に注目を与える（強化）

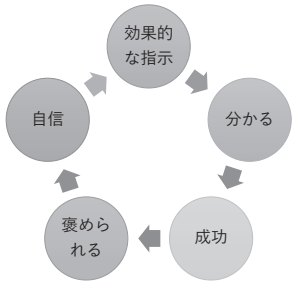


困った行動を無視するのは少し危険で、困った行動が一時的にさらにひどくなって、そこに大人が関わるとさらに強化されてしまうことがあります。困った行動は見ない聞こえないふりをしながら、他の良い行動をすかさず具体的に褒めていくと、困った行動の方は自然と減っていきます。

ヒント３　効果的な指示の出し方

効果的な指示とは、わかりやすい指示のことです。効果的な指示を出すと、理解しやすくなって指示に従うので褒められる。そして、自信をつけていくという好循環になっていきます。例えば「早くお片付けしなさい」と指示されると、「早く」ってどういうことかピンと来ない子もいるし、「お片付け」と言われてもどうすれば良いのかわからない子もいます。発達の特性や遅れがある、その場の状況や言葉の意図をうまくキャッチできない、コミュニケーションがうまくいかない子に指示がしっかり伝わる「効果的な指示の出し方」をお伝えします。効果的な指示を使うと、6割の子で指示を聞くことが増えるという研究もあります。

ヒント3　効果的な指示で成功体験を増やす



ご紹介するのは「ＰＣＩＴ親子相互交流療法」と「子どもと大人の絆を深めるプログラムＣＡＲＥ」を基にした「効果的な指示の出し方」の一部です。

まず1つ目は「発達的にふさわしい指示」であること。その子が確実にできる指示が、効果的な指示です。例えば、まだ自分一人で着替えができない子に「お着替えしなさい」というのは効果的な指示ではない。２つ目は「直接的な指示」。「～できるかな」といった質問に見せかけた間接的な指示は分かりにくい。例えば「片付けなさい」と具体的に言い切りましょう。「机の上の物を片付けなさい」「カバンに入れて片付けなさい」とさらに具体的に言う場合もあります。次に「中立的に」、落ち着いた声の調子で。「もういい加減にしなさい！帰るよ！」と感情に訴えるような声だと、声の調子に気を取られてしまい、内容が頭に入りにくくなります。

指示は「一度に一つ」。保育園で「お部屋に戻ったら、手を洗って、お茶を飲んで、トイレに行ってらっしゃい」といった指示をされることがありますが、それでわからない子には1個ずつ指示をしていく必要があると思います。「お部屋に戻りなさい」ができたら、「手を洗いなさい」。一つの指示にした方が、その子は安心して指示に従える。一度にたくさん言ってしまうと難しいのは、まずその子が覚えきれない。キョロキョロと周りを見ながらやるだけなので、自発的な行動にならない。海外に行って言葉が通じないのに街中を歩くみたいな不安を抱えるわけで、だんだん集団行動、集団生活がつらくなってしまう。わからないことは、本人にはすごく心理的な負担になります。

効果的な指示の出し方(1)

子どもが指示を聞くことが6割増えるという研究もあります

効果的な指示	わかりにくい例
発達的に相応しい指示	発達的に相応しくない指示
直接的に　「片付けなさい」	間接的な指示 「片付けられるかな？」「やってみる？」
中立的に（落ち着いた声の調子で）「これから帰ります」	感情的な声の調子の指示 「いい加減にして！」「お願いだから」
一度に一つ　「おもちゃ片付けなさい」	一度に複数の指示 「おもちゃ片付けて、トイレ行ったら、お風呂に入りなさい」

指示はできる限り「具体的に」。「ちゃんと」「きちんと」は、わかりにくい。「ちゃんとしなさい」ではなく「質問に答えなさい」「椅子に座りなさい」と具体的に言うと良いと思います。次は「肯定的に」。例えば「例えば走っちゃダメだよ」と言われて、ピョンピョン飛び跳ねる子もいる。「○○しないで」と否定形で言うと、○○が逆に意識に残って、やりたくなってしまい行動を誘発するという一面もあります。できるだけ肯定文で、やってほしい行動を伝えてください。カジュアルな言い方は子どもとの関係性を温かなものにしますが、「丁寧に」。「○○ください」と丁寧な言い方をした方が、子どもには真剣な指示だということが伝わります。最後に「５秒間ルール」。一個の指示を出してから５秒ぐらいは待った方が良いと言われています。子どもは神経の発達が途上なので、言われた言葉を脳の中で電子信号に変えて、今度は脳から脊髄運動神経の方に伝えるのに時間が必要です。今やってる遊びをやめて、言われたことに移るまでに５秒ぐらい待ってあげましょう。

効果的な指示の出し方(2)

効果的な指示	わかりにくい指示
具体的に　「座りなさい」	曖昧な指示　「ちゃんと」「きちんと」
肯定的に　「歩きなさい」	否定的な指示「〇〇しません」 「走っちゃだめ」
丁寧に「先生に見せてください」	聞き流しやすい指示「ちょっと見せて」
5秒間ルール（指示の後、静かに5秒待ちチャンスを与える）	指示の連呼「こっちに来て！いらっしゃい！早く来てって言ってるでしょ！」

ブロークンレコードテクニックという効果的な指示の出し方を紹介します。昔の円盤レコードは、傷がつくと同じフレーズを何回も繰り返しますが、これと同じように中立的で、同じ声の調子で、直接的に、肯定的に指示を出すという技法です。大人が効果的な指示を出す練習にお勧めします。子どもに簡単な指示を出します。同じ言葉で落ち着いた声の調子で穏やかな表情で、指示と指示の間は5秒間待ちます。そして、子どもが指示に従ったら、すぐに具体的に褒めましょう。最後まで指示を聞かない場合は、最初の簡単な指示は打ち切ります。指示を繰り返す回数は3回ぐらい。それ以上繰り返すと子どもが面白がってふざけてしまうことがあります。

効果的な指示の出し方(3)

・ブロークンレコードテクニック

中立的で、同じ声の調子で、直接的に、肯定的に指示を出す技法

① 同じ言葉で、落ち着いた調子の声で、穏やかな表情で
② 指示と指示の間は5秒間待ちます。
③ 子どもが指示に従ったら、すぐに具体的に誉めます。
最後まで子どもが従わない場合は、大人は他のことをします。

ブロークンレコードテクニックの例

大人:「お帰りの時間だからおもちゃを片づけなさい」
子ども:「なんで？まだ遊ぶ！」
大人:「お帰りの時間だからおもちゃを片づけなさい」
子ども:「やだ！先生が片付けて！」
大人:「お帰りの時間だからおもちゃを片づけなさい」
子ども:(渋々片づけ始める)
大人:「お片付けしてえらいね!」(にこやかに褒める)

まとめ

幼児期から誤学習を予防しましょう。発達障害のお子さんは、叱ったり注意される、失敗を重ねる中で、間違った対処法を身につけてしまうことがあります。例えば、叱責を避けるために嘘をつく、非を認めない、黙り込んでしまう。それから暴れたり、引きこもったり。これを誤学習といいます。小さなうちは大人の力で対処ができますが、学齢期青年期以降になると家族が疲弊し、自身の自己肯定感も下がって、その後の人生が、支援が必要あるいは社会的に孤立したものなってしまうかもしれません。

不適切な環境では、困った行動が顕著になりやすい。特性自体は、見方を変えれば、可能性とか強みになる場合もある。特性は必ずしも軽減させる必要はなく、それをうまく活かせる環境を整える方が、取り組みやすい。問題行動は、環境に彼らが困った結果、「困っているよ、ちょっと考えてよ」と大人に問題提起していると捉えることができます。周囲がその子の特性や背景を理解して、適切な環境調整や支援をすることで問題行動は減少します。

「やってみて、言って聞かせて、させてみせ、褒めてやらねば人は動かず」という言葉があります。山本五十六という教育者の名文です。指示するだけでは相手は動きません。まずは自分が率先して模範を示し、次にわかりやすく説明してやらせましょう。最後に相手の努力を褒めると、自分から行動するでしょう。まずは先生方がモデリングをして、わかりやすく説明し、先生がサポートをして、最後にその子が一緒にできた時に褒める、そうするとその行動を獲得するという、まさに行動形成の原理そのままです。環境調整に加えて、ぜひ取り組んでいただきたいと思い、この言葉を付け加えました。

最後に実用的な本をいくつか紹介します。

◉氷山モデル・ABC分析（林 大輔　著／中央法規出版）
氷山モデルとABC分析の両方が勉強できます。大人の事業所の所長さんが書かれた本でシートもついていて非常によくできた本です。

◉発達障害の子の育て方が分かる!ペアレント・トレーニング（上林 靖子　監修／講談社）
保護者向け、初めてのペアトレ入門書です。一目で分かるイラスト付きです。

◉保育士・教師のためのティーチャーズトレーニング（上林 靖子　監修／中央法規出版）
ペアレントトレーニングの保育士・教師版で、イラスト付きで非常にわかりやすく書かれています。

◉CARE　子どもと大人の絆を深めるプログラム
https://www.care-japan.org/　一般社団法人CARE-Japan
今日お伝えした内容の一部、特に後半の効果的な指示の出し方などをさらに学べるようなワークショップをやっています。ご興味のある方はホームページをご覧ください。

※本稿は、令和7年11月5日に開催された、名古屋市西部地域療育センター連続講座講演会の内容を一部加筆修正してまとめたものです。

令和8年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

（申込方法等は、送付される案内通知等をご確認ください。申込を開始してから、定員になり次第締め切ります。）

通園部一日体験

会　場　西部地域療育センター内通園部「キララ」
内　容　通園部での療育を１日体験していただきます。
対　象　保育所･認定こども園･幼稚園･小規模保育事業所等の職員の方
日　時　①令和8年 9月 3日（木）
②令和8年10月 9日（金）
③令和8年10月27日（火）

療育グループ体験

会　場　西部地域療育センター療育グループ
内　容　午前中の療育グループに参加いただきます。
対　象　保育所･認定こども園･幼稚園･小規模保育事業所等の職員の方
日　時　①令和8年 9月14日（月）
②令和8年10月 5日（月）
③令和8年10月 8日（木）
④令和8年10月22日（木）

講演会

テーマ　「発達凸凹キッズが成長する園生活でのサポート」
講　師　発達専門小児科医　石川 道子 先生
会　場　中川文化小劇場
対　象　保育所、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員の方
日　時　令和8年11月11日（水）15：00～17：00

専門職（体験型）講座

テーマ　「スター・ペアレンティング」
講　師　小児科医　後藤 紀子 先生
神野 真由美　看護師
会　場　西部地域療育センター
対　象　保育所、幼稚園、児童発達支援事業所の職員の方
日　時　令和8年12月 3日（木）15：00～17：00

名古屋市西部地域療育センターだより　第47号
発　行　日　2026年8月
編集・発行　名古屋市西部地域療育センター
〒454-0828　名古屋市中川区小本一丁目20-48
Tel.（052）361-9555　Fax.（052）361-9560

この機関紙は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。